



幼馴染みのAV男優が、私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる

♥アフターストーリー♥ 体験版

幼馴染みのAV男優が、私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる

♡アフターストーリー♡

①キッチンでの駆け引き



※画像はPixAIで作っています※

【本作をお読みいただく前に】

本作は、ヒロインを愛するあまり狂った独占欲を見せるヒーローとのロマンスを描いた作品【幼馴染AV男優が私にだけ独占欲を向けてくる】の完結後を描いた番外編です。本編ネタバレを含みますのでご注意ください。

読者の皆様に安心してお楽しみいただくため、以下の要素が含まれることを予めご了承ください。

【過激な描写】

作中、ヒーローによる重めの愛撫が含まれます。

シチュエーションおよび、過激な性描写（ポルチオ・中出し）が苦手な方は、閲覧をお控えいただくか、ご注意の上お楽しみください。

登場人物紹介

・天音 紗良（あまね さら）／アマオト

本作のヒロイン、女性向けAV脚本家

ヒーローとは幼馴染で同業者。テレビドラマの脚本家を目指すが、現在はAVの脚本家。

・星川 蓮（ほしかわ れん）／レン

本作のヒーロー、人気イケメンAV男優

表向きは幼馴染を装っているが、裏では紗良に対して狂氣的独占欲と執着心を隠し持っている。

【完結後番外編①】

キッチンでの駆け引き

蓮と無事に夫婦になり、彼のマンションに引っ越して来て二ヶ月あまり。

キッチンでキャベツを刻む小気味よい音が響いていた。

「よし、あとは一煮立ちさせて……」

紗良さらは新調したばかりの、淡い黄色のエプロンの紐をきゅっと結び直す。時計の針は午後八時を回ったところだ。

そろそろ、プロデューサーとしての仕事を始めた夫——蓮れんが帰ってくる時間だった。

ガチャリ、と玄関の鍵が開く音がして「ただいま」と声がかかった。洗面所で手洗いを終えてから、足音が廊下を渡ってくる。

「ただいま、紗良」

「お帰りなさ——ひいつ!？」

振り向くよりも早く、背後から巨軀に押し包まれた。首筋に唇が押し付けられ、紗良は思わず首をすくめる。

「ちょっと蓮、危ないってば。今火を使ってるんだから。手洗い、うがいした？」

「した」

「離れてってば」

「いーじゃん。一日中、お前のこと考えてて死にそうだったんだから……っていうか、何その格好。めっちゃくちゃ可愛いんだけど」

蓮の低い声が、紗良の耳元で怪しい色を帯びた。

「見せてなかったっけ？ この間買ったばかりなんだけど、可愛くて一目ぼれしたエプロンなの」

後ろから回された蓮の手が、エプロンの上から紗良の細い腰をぐっと引き寄せる。布地越しでもわかるほど、蓮の分身が主張している。それが、紗良のお尻の割れ目にぴったりと押し当てられた。

「れ、蓮……ご飯、もうすぐできるから、先にシャワーとか——」

「無理。お前がエプロンなんか着て誘ってくるのが悪い」

「誘ってないっ……!」

「嘘つけ。後ろから見たら、腰のくびれが強調されててすげえエロい。それに、俺のために飯作ってくれてるんだろ？ 勃たない方がおかしくない？」

「そんなことで勃つ方がおかしいってば」

「夕飯作ってくれてるのをそんなことで片づける夫がいるかよ。嬉しすぎて今すぐ抱きたい」

大きな手がエプロンの裾をあつという間に捲り上げ、部屋着のショートパンツの中に滑り込んできた。

「あ、蓮ってば！」

直接触れてくる彼の手のひらは驚くほど熱く、慣れた手つきでショーツの紐に指が掛けられる。

「……！　だめ、ここで、は……」

「だめじゃないだろ？　俺の奥さんなんだから。あ、でも、火は危ないもんな」

蓮は意地悪く微笑みながらコンロを止め、紗良の身体を抱き上げてキッチンの調理台の上に腰掛けさせる。そして、キッチンタイマーの数字ボタンを入力した。

液晶画面には、五分が表示された。

「……蓮？　何するの？」

「タイマーが鳴るまでの五分間、俺の指に耐えられたら大人しく飯食べて寝る。だけど、もし声を漏らしたら……今夜は朝まで抱かれるコース。いいな？」

「そんなの、絶対無理……っ！」

「あきらめるの早すぎない？　じゃあ俺が不戦勝で、紗良が負けてこといいな」

「それはダメ。昨日もしたし、今日はゆっくり寝たいから勝つ！」

「そう来なくっちゃ。じゃあ、ゲームスタートな」

蓮の指がタイマーのスタートボタンを押す。ピツという音とともに、カウントダウンが始まった。

豪語したのだから、紗良だって負けたくない。

それに、蓮に毎晩のように求められすぎて寝不足でもある。

「今夜こそ、ゆっくり寝るんだから……！」

「寝かしてやりたいんだけどさ、寝顔見ると可愛すぎて……エプロンは新調したんだし、外したくないよな？」

言いながら、蓮の手は紗良の部屋着の上をまくり上げていた。エプロンのシヨルダー部分を左右に広げると、下着が露わになってしまう。

「ヤバいな。俺の方がいつまでもつかない」

下着の上から胸を優しく揉みしだかれ、紗良は腕で口元を押さえた。蓮はニヤニヤしながら紗良を見てくる。皆だった下着を引っ張って、紗良の胸を露出させてしまった。

「めっちゃ吸い付きたいけど、指限定だったっけ」

優しく触られるのかと思いきや、蓮は外気に触れた頂を、いきなりきゅっと摘まんだ。紗良は思わず喉を引き絞る。ギリギリセーフで、声は出ていないはずだった。

「紗良、つらそうだしハンデやるよ」

蓮は、まくり上げた服の裾を紗良の口に押し込んでくる。

「それ啜えてろ。声、抑えられるだろう？」

紗良は意地になって要求を呑み込んだ。

蓮は紗良の後頭部に手を当てて、挑発的な笑顔を浮かべながら覗き込んでくる。

意地になっていたが、親指で頂をやわやわと触られると身体は勝手に反応してしまう。悔しいけれど、たったこれだけの刺激にも耐えられないくらい、紗良はすでに蓮に愛されすぎているようだ。

「あー可愛い。感じてんだな。乳首えっろ」

耳元で実況されると、よりいっそう羞恥心が沸き上がってくる。必死に我慢していると、蓮の手が胸からお腹に移動し、部屋着のパンツをあつという間に下ろしてしまった。

（こんなことになるなら、スポブラにしておけばよかった……!）

紐タイプのショーツに蓮は機嫌をよくして、嬉しそうにショーツと秘部の境目をゆっくり撫で始める。

「……う……」

くすぐったさに身体を震わせると、蓮は笑みを深める。

すでにじつとりと湿り気を帯び始めていた紗良の割れ目に、指を滑り込ませてきた。

「……っ！」

「声出たら負けだぞ、紗良。我慢しないと、本当に朝まで抱きつぶすからな」

蓮は満足そうに目を細め、指先でクリトリスをコリコリと優しく押し潰すように愛撫し始めた。核心を外すような、焦らすような絶妙な愛撫に紗良の腰がビクンと跳ねる。

「我慢できて偉いな。じゃあ、もう少し頑張ろうか」

蓮は紗良の両足を持ち上げて台上に載せる。キッチンで大きく開脚する形になり、さすがに恥ずかしくて顔から湯気が出そうになっていた。

「苦しそうだし、紐も外してやるからな」

ショーツの紐を解かれ、露出した割れ目に蓮の指があてがわれる。

「濡れすぎ」

三本の指が割れ目をゆっくりとなぞり、愛液を襲やクリトリスにまで塗り広げた。

「擦っただけで、もっと溢れてきた……もったいねえな、全部舐めたいのに」

蓮は紗良の愛液で糸を引く指先を、わざわざ目の前に持って来て見せびらかしてくる。そして濡れている指先をパクツと口に入れてしまった。

「あ、蓮！ 汚いから！」

「汚くないし甘いんだけど……なに、もうハンデ要らないの？」

蓮の顔が迫ってきて、たまらずキスをしていた。待っていたかのように蓮の指が紗良の中にずぐ、と入ってくる。

「むう……んっ……」

指がゆつくりと出入りし、ぬちゃぬちゃと音が聞こえてきた。指が二本に増やされてしまい、声を堪えるために蓮の肩に縋り付き、皮膚に唇を押し当てる。

「んんーっ！ んっ………！」

「可愛い。噛みついてもいいぞ」

愛液がかき回され、びちゃ、ぐちゅ、とキッチンの大理石の台に卑猥な水音が響き渡る。

（こ、これ……あとどれくらい我慢しなくちゃなの……!!?!）

見ると、タイマーの残り時間は、まだ三分以上残っていた――。

幼馴染みのAV男優が、私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる

完結後 番外編②

城拓と甘く労われる夜



※画像はPixAIで作っています※

【完結後番外編②】

嫉妬と甘く労われる夜

『——佳作、星川紗良様。おめでとうございます！』

パチパチと鳴り響く拍手の中、紗良は緊張で震える手で賞状を受け取った。

都内の中堅企業主催の小規模な映像作品コンテストに応募した紗良の脚本が、見事受賞したのだった。もちろん、こんなすごい結果になるなんて、紗良自身が夢にも思っていなかった。

それは、ヒューマンドラマの脚本家としての、栄えある一步に間違いない。

（早く、蓮に報告したい……！）

授賞式が終わったあとの懇親会でも、胸の鼓動は高鳴ったままだった。式は都内のホテルだったので、終わるとすぐに紗良は駅へ駆け出す。

スマートフォンを取り出して、撮ってもらった写真を蓮へ送信した。

『授賞式の写真送るね。今から帰るよ』

すぐに蓮から返事が来て、『おめでとう』の文字に紗良は胸がいっぱいになる。浮足立っていたので、気をつけて帰らなくてはと改めて気を引き締めた。

「ただいま！」

「おかえり紗良、おめでとう！」

玄関のドアを開けた瞬間、紗良は待ち構えてくれていた蓮の胸に飛び込んだ。

「蓮ー！ 応援してくれてありがとう！ やつと……やつとだよ！」

大きな身体に包み込まれ、蓮の髪から香るいつものムスクの匂いにホッとする。

蓮は紗良を抱き上げたままリビングまで運ぶと、ソファに座らせて、これでもかというほど優しく何度も頭を撫でてくれた。

「すげえな、俺の奥さんは。毎日遅くまでパソコンに向かって頑張ってたもんな。誇らしいよ」

「ふふ、ありがとう。蓮が色々アドバイスくれたおかげだよ」

「いや、紗良の実力。本当にすごいよ」

蓮はそう言って、紗良の目元や頬、そして唇に、小鳥がついばむような優しいキスを何度も落としたりした。

最高の「よしよし」に、紗良は今日までの疲れがすべて吹き飛んでいく。受賞の満足感と、素敵な旦那に褒めてもらえる幸福感に満たされていた。

けれど――。

「あ、そうだ。送ってくれた写真、見たぞ」

蓮がポケットからスマートフォンを取り出し、画面に紗良の授賞式の時の写真を映し出す。

そこには賞状を持って満面の笑みを浮かべる紗良の姿と、隣で親しげに話しかけてきている男性の姿が映っていた。蓮は男の姿を指さす。

「これ、誰？」

「あ、協賛企業の会社の役員さんらしいの。彼、私の作品をすごく褒めてくれて。お名刺もいただいていてね——」

「この男さ」

鞆から名刺を取り出そうとした紗良の手を蓮が掴んで止めた。

なんだか機嫌が悪いように感じ、紗良は蓮を見上げる。すると、口元は笑っているのに目が完全に笑っていない蓮の顔が間近にあった。

「紗良のこと、完全にそういう目で見てると思うんだけど」

「え……？ そんなわけないよ。だって私が既婚者だってわかっているし、パーティーとはいえ仕事なのに、そんな目で見てるわけないでしょ？」

「そう？ なら俺の思い違いか」

「そうだよ、変なこと考えるわけないよ。授賞式なんだし」

「そっか。紗良、改めておめでとう」

突然、蓮が覆いかぶさってきた。彼の大きな手で、背後のソファへ身体を強引に押しつけられてしまふ。

「可愛い俺の奥さん。才能ありすぎて心配」

蓮はいとおしむような目つきで紗良を見つめると、深く口づけを施してくる。

「……いっぱいお祝いしたい」

「ありがとう、蓮。もう十分お祝いの言葉もらったし、側にいてもらっているだけで嬉しいから…

…」

「そんなこと言わずに、祝わせて。今夜は嫌もダメもなし」

蓮は紗良のブラウスのボタンに手を掛け、ぶち、ぶち、とボタンを外していく。

「蓮、私疲れてるし、シャワー浴びてないから……」

突然スマートフォンが鳴り、紗良は蓮を押しつけるようにして半身を起こした。画面を見ると、先ほどのパーティーで名刺を交換した役員からだ。

「すごい、しごでき！ 早くお返事返さないと……」

「こんな夜中にメール送ってくるやつがいるかよ。非常識だろ」

「夜にごめんなさいって書いてあるよ。お返事不要だけど、早く写真を送りたいからって」

しかし、返信をする前に紗良の手からスマートフォンが取り上げられてしまう。

「あ、返してよ！」

「俺の目は誤魔化せないぞ。お前が嬉しそうに笑うから、完全に付け上がったに違いない」

「普通に仕事だってば」

再度通知が鳴り、そこには今日の写真が添付されている。蓮はその一枚を指さし、ムツと眉根を寄せた。

「これ見ろ。紗良の腰に手を回してこようとしてるだろ」

「何言ってるの……？ そんなわけ——ひゃんっ!？」

見上げた蓮の瞳の奥には、いつもなら優しく紗良を溶かすはずの光はない。代わりにドロリとした暗い嫉妬の炎が燃え盛っている。

「俺以外の男に無防備な笑顔見せるのは禁止。ちょっと目を離したらこれだから、俺の奥さんは困るな」

蓮の低い声が、紗良の耳元で狂暴な色を帯びて響いた。

「蓮……？　なに？　どうしてそんなに怒ってるの……？」

「奥さんが無自覚に男を誘うフェロモン出してるからだろ」

「出してないってば！　ちょっと嬉しかったし、いつもより喜んじやったけど……」

「それがダメ。お前、自分がどんだけ可愛いかわ覚してないだろ？」

「普通の、一般的な、既婚者アラサー女子だってば！」

「お祝いに甘やかしてやろうと思ったけど、お仕置きも必要だな。二度と俺以外の男の前で嬉しそう
な顔見せないように、躰し直す」

「ちょ……蓮、冗談やめてってば。本当に何もなし、皆そんなに私に興味ないってば」

「奥さんの躰は定期的に必要なことなんだよ」

紗良が止めるように伝えてもがいたところで、嫉妬に狂い始めた蓮の手が止まるはずがなかった。

幼馴染みのAV男優が、私にだけ狂った独占欲をむき出しにしてくる
完結後 番外編③
宛名は『星川』さん



※画像はPixAIで作っています※

【完結後番外編③】

宛名は『星川』さん

インターホンの音に急かされ、紗良はパタパタとスリッパを鳴らして玄関へ向かった。

「はい、今行きます！」

ドアを開けると、宅配便の配達員が「いつもありがとうございます、サインお願いします！」と爽やかな笑顔で端末を差し出してくる。

「ありがとうございます、お疲れ様です」

受け取りの電子ペンを握り、液晶画面に目を落とした瞬間、紗良の手がピタリと止まった。

お届け先の欄に印字されていたのは、見慣れた以前の苗字ではない。

『星川 紗良様』

（あ……そっか。私、本当に『星川』になったんだ……）

入籍の手続きをしてからそれなりに日は経っているものの、こうして荷物の宛名として自分の名前が
変わっているのを目にすると、不意打ちで胸の奥がキュンと跳ねる。

文字の一つひとつから、彼と家族になったのだという安心感がじんわりと染み出してくるようだった。

にやけそうになる口元を必死で引き締めながらサインを済ませ、小箱を抱えてリビングへ戻る。

完全にオフの蓮は、ソファで気怠げに足を伸ばしてTシャツ姿でスマホを眺めていた。紗良が戻ると顔を上げてこちらをチラリと見てくる。

「おかえり。何届いたの？」

「ネットで頼んでた仕事用の資料……ねえ蓮、見て」

「ん？」

紗良は嬉しさを隠しきれず、小箱の伝票を蓮の目の前に突き出した。

「宛名がね、ちゃんと『星川』になったの。なんだか、こうやって文字で見ると……まだちょっと照れちゃうなーなんて」

紗良がえへへ、と少し恥ずかしそうに首をすくめると、蓮の目が細まる。

「……へえ」

蓮はスマホをローテーブルに放り出すと、ゆっくりと上体を起こす。口元にはいたずらっぽい笑みが浮かんでいた。

「嬉しそうだな。そんなに『星川』の名前が気に入ったんだ？」

「え？ あ、うん……蓮の奥さんなんだなって……」

蓮の雰囲気が一瞬にして『優しい旦那様』から、紗良を狙う獲物の目になる。気圧されてしま
い思わず一歩後ずさろうとしたが、それよりも早く、彼の手に腰をガシッと掴まれた。

「きゃっ!?!」

「信じられねえよな。あのクソ真面目だった揭示係のお前が俺の妻だなんて」

「ちょ……一体いつの話してるのよ!?!」

「小学校。俺、ガキの時からけっこう人気あった記憶がある」

たしかに小さい時から、蓮は運動ができて活発で皆から好かれていた。勉強はあんまり得意ではなかったけれど、成績がとんでもなく悪いとかではなかったはずだ。

「そうね。あんたいつも、話題の中心にいたもの。中学でも高校でも。ほんと、家が近くなかったら絶対に仲良くなっていなかったタイプ」

紗良は明るく染め抜いてある蓮の髪の毛をわしゃわしゃと撫でた。

「紗良は目立たない方だったよな。ずっと吹奏楽部と新聞部掛け持ちしてたっけ?」

よく覚えているなど、紗良は舌を巻いた。大学で離れても、結局実家から通える範囲の学校だった

ため、近所ではよく顔を合わせていた。コミユカお化けの蓮は紗良の両親からも絶大な信頼を得ており、なぜか蓮が夕食を食べに家に上がり込んでいたことは数えきれない。

それも、今となつてはいい思い出とも言える。

蓮は紗良を抱き寄せるようにする。思わずバランスを崩し、紗良は蓮の膝の上に座り込んでしまっていた。

「真面目ない子ちゃんの紗良が、人気者だった俺にベッドの上でひいひい鳴かされてるなんて、同級生の誰も想像してないんじゃないの？」

「ちょっと、そういうこと言わないで！ 恥ずかしいから」

蓮は紗良の両手を誘導して肩に載せる。腰を持ったかと思うと、スウェットをずるりと引き下げてしまった。

「な、にするの！」

蓮は紗良のお腹に顔を寄せ、頬を擦り付けてくる。

「こんな細くてちいこい身体で、俺のこと受け入れてるの可愛いなって思っ

「あんたのが大きすぎるのよ」

蓮は紗良を見上げてくる。

「ねー、星川・紗良になった感想教えて」

急に甘い瞳で見つめられてしまい紗良は返答に困った。

「その……」

「なに？」

嬉しい気持ちはある。と同時に、恥ずかしさも。

素直に嬉しいと言えば、蓮を喜ばせるだけでなく付け上がらせてしまうだけだというのもわかって
いた。

ここは妻として、しっかり夫をコントロールしなくてはと紗良はコホンと咳払いした。

「苗字が変わって、変な感じ」

その答えを蓮は予想していなかったらしい。ムツと眉根を寄せると、紗良のへその中に舌を入れてきた。

「ひゃあっ！」

強めにお尻まで掴まれてしまい、紗良は気が動転する。

「そういう態度取っていいと思ってるわけ、星川さん？」

「蓮ってば！」

「紗良が『星川』さんになった自覚があるか、身体の奥まで確かめてあげないとだな」

愛おしさと、サディスティックな意地悪さが混ざり合った蓮の視線に射貫かれ、紗良は肌を粟立たせた。

体験版はここまでです。

製品版をお待ちください。

